

# 淨土への招待

横芝光町の  
仏像展



横芝光町教育委員会

## はじめに

横芝光町は、千葉県の東部、太平洋岸に面して、九十九里平野と下総台地が広がる、緩やかな土地で温暖なところである。その土地の歴史は、古くは旧石器時代の三万年前から、縄文・弥生・古墳と統いて人々は自然と共に暮らし、奈良・平安時代になると急速に開発が進み、多くの人々が住む様になつた。それに伴つて自然（精靈）崇拜の原始宗教から、哲学思想を有した仏教が入り、宗教の近代化がなされていった。平安時代後半になると各地で武士が発生し、特に両総地域では桓武平氏と呼ばれる武士団が最も早く出現していた。そうした武士団が鎌倉時代になると政治の舞台の表へと出て力を有していくと、仏教へ帰依するようになり、檀那となつて各地に寺院を創建する様になつた。町内でも現在も各集落には必ずと言っていいほど寺院堂宇があり、その境内には五輪塔や板碑などの中世石塔を見ることができ、この時期から存在した寺院であることを物語っている。江戸時代になると各集落の寺院は檀家制度に組み込まれ、地域との結びつきを強めていったが、近代になると檀家制度の崩壊により、集落の寺院は存続が困難になり、住職が不在になつたり統廃合されていった。最近では寺院の名残として小祠や墓地のみが残されているところや、地域住民にも忘れ去られているところもある。それでもごく一部の住民の情報を元に探してみると、小祠に仏様が隠れる様に納められていたり、寺名も分からなくなつた堂宇に仏様が安置されている所があり、かつての仏教の里がよみがえつてくるようである。

今回の展示は、このような町の仏教環境の中で、町内で四件ある県指定有形文化財の仏様のうち、昨年、修理を施した仏様を、その修理成果を公開することを第一の目的として実施するどもに、町内の他の指定仏像や無指定の現存する今も古色を残した仏像もあわせて公開し、いかにこの町に多くの優れた仏像があるかを示そうとした。こうして集めた仏像・仏画は三十三件、五十点におよぶが、集めた仏像の多くがほこりが被つているだけでなく、破損しているものが多かつた。指定している仏像であれば、修復するなどの手立てを考えるが、無指定のものは管理者の責任にかかっている。まだ、仏像がある所はましで、今回の企画展を実施するにあたって、事前調査して来た中には盗難にあつて何も残されてない所も少なからず見られた。今回の企画展では、こうした仏像の文化財としての大切さを喚起するするだけでなく、信仰の対象としての「仏様」を見直し、それを一つの核として地域の繋がりを継承されることを願つてもいる。

今回、この仏像展を実施するにあたつて、関係者の皆様、実行委員会の先生方には、ご指導・ご助言を頂きました。また、町内の仏像管理者からは多大なご協力を得、仏様の貸出に快く応じていただきました。中にはこのような企画を待ち望んでいましたと、勇気の出るお言葉も頂きました。あらためて皆様に心から御礼申し上げます。

「浄土への招待」横芝光町の仏像展開催にあたつて

「浄土への招待」横芝光町の仏像展は平成二十五年六月二十二日～七月二十一日に町立図書館二階町民ギャラリーで開催した企画展である。

本企画展を実施するにあたつて、実行委員会を組織し、委員の先生方に展示仏像の選定等、ご指導・ご助言を賜った。

「浄土への招待」横芝光町の仏像展実行委員会（敬称略）

委員長 橋浦芳朗（永享寺副住職）

委員 大津頼政（隆台寺住職）

委員 半田照善（新善光寺住職）

委員 塚本是順（弘経寺住職）

委員 久保田剛士（明光院住職）

本図録は、「浄土への招待」横芝光町の仏像展に展示した仏像及び仏画等を収録し、解説したものである。  
本図録の執筆・編集は道澤明が当つた。

謝辞

「浄土への招待」横芝光町の仏像展を実施するにあたり、多くの関係者のご協力を賜りました。ここに記して心より御礼申し上げます。（敬称略）

小川台隆台寺

上原持宝院

篠本新善光寺

二又長福寺 傍示戸成就院

千葉市美術館 古仏修復工房

飯泉太子宗 加瀬喜久治

越川裕男 片岡鉄夫

向後通 越川壽満男

實川信夫 齋藤勝

竹内敏恭 横口広三

水須健之 鈴木平

宮内敏彦

## 横芝光町の仏像概観

横芝光町には、平安時代作と伝わる県・町指定の仏像は知られていたが、今回の企画展実施のための調査を一年にわたって調査した結果、多くの古相を残した仏像等があることを知った。個々の仏像を挙むと、この地域での特徴をつかむことは難しかつたが、一同に集めて眺めてみると、一定の特徴があることが分かつてきた。しかし、ほんどの場合、無住のお寺や祠のような所に安置され地元からも省みられなくなつて、破損したり埃まみれになつてある仏像が多くた。そのような仏像はその伝来すらも分からなくなり、かつ仏像そのものに銘すらも書いていないものが多かつた。そのため、正確な像立年代の分かる仏像は皆無であった。そのような中で、横芝光町の今ある仏像について簡単ながらその概観を、ここに述べることにする。

これまでに分かつてゐる中で、横芝光町の仏像で最も古いものは、辻觀音院の阿弥陀如來坐像である。この仏像は端正な顔立ちと衲衣の文様などから、平安時代後期の定朝式の流れを汲むものとして評価され、おそらく京仏師の作であろうと考えられている。次に平安仏と考えられているのは、宝米明光院の阿弥陀如來三尊像のうちの主尊である。木造でだいぶ痛みが著しく、本来の姿は失っているが、顔立ちの面相や衣の形相から平安仏の特徴を示している。なお、脇侍は鎌倉時代の作と考えられている。

鎌倉時代では、前出の宝米明光院の阿弥陀三尊像の脇侍で、木造であるがこの時期の善光寺式三尊像の觀音・勢至菩薩像と同じ姿であり、主尊の阿弥陀如來像にこの時代に脇侍を追造して、この時代に流行つた善光寺式三尊像としたのであろう。鎌本新善光寺と小川台隆台寺の銅造阿弥陀三尊像は、鎌倉時代後期の典型としてその存在を示し、千葉県内でも類例が多く知られている。

また、昨年度修理した古屋薬王院の薬師如來像は、当初平安時代の作と思われていたが、修理時の調査によつて胎内銘に承久元年と墨書があり、あわせて大檀那平常秀名があり、造立以来、背をはずしての修理が確認できることから、この紀年銘が造立年と判断された。この像に関しては、等身大の大きさに、重厚な彫りと衣紋の形から、平安時代の作と思われてきた。また、今回の修理では、表面に麻布を貼り、漆を厚く塗る木芯乾漆造と言う技法を使つていて判明したことから、当初は古いと考えられた。そのようなことで、胎内銘があつたことで霧が晴れた気持ちになつたが、さらに仏像の復古造があつたとい

う新知見が得られたことは大きな収穫であった。

#### 南北朝・室町時代

南北朝から室町時代では、京・鎌倉辺りでもあまり名のある仏像は知らないが、本町内でも明確にこの時代のものであるといえる仏像は少ない。わずかに市野原馬頭観音堂にあった聖観音菩薩立像が、山武市西照寺の十一面観音菩薩立像に比較できる。同様な形の仏像では、辻觀音院の聖観音菩薩立像もあるが、こちらは最近の修理によつて塗り直され、本来の彩色が分からなくななり、制作年代が分からなくなってしまった。このほかにも二～三件、この時期にまで遡るかと考えられる仏像もあるが、不明な点があるのでこのあとの時代の範疇としておく。

#### 江戸時代

江戸時代になるとお寺は、檀家制度によつて体制に組み込まれ、多くの寺院の建立と仏像が造られていった。その中で幕府は徳川家康の死去後、日光に東照宮と輪王寺を建立するため、そこに多くの仏師や大工が全国から集められた。それらができた後、仏師や大工が江戸を本拠にして関東各地の寺院建立や仏像造立に関わつたという。その仏師の系統が慶派の流れを引く京都の七条仏師で、町内の多くの仏像はこの流れの仏師によつて造られたと思われる。それらの仏像の特徴は、端正な顔とバランスのとれた体形、全身に彩色が施され、手慣れた仏師の作であることが分かる。また、台座や光背も丁寧に造られている。この時代の仏像では、こうした仏師の作とは異なる、一本造で素地のままの素朴な彫りの仏像がある。この時代、円空や木喰などの遊行僧による造仏が有名であるが、それ以外にも多くの僧か仏師でないものの造仏があつたのであろう。

#### はじめて 次

「淨土への招待」横芝光町の仏像展開催にあたつて

横芝光町の仏像概観

- 一 淨土への仏様
- 二 小さい仏様
- 三 被災した仏様
- 四 曼荼羅
- 五 女性の仏様



1

阿弥陀如来坐像

木造 彫眼 漆箔

像高 五三・三cm

平安時代後期 十二世紀

辯観音院

千葉県指定有形文化財

ヒノキ材の一木割矧造で、漆箔で仕上げられた、端正な顔立ちの如来像である。昭和五十三年に修理され、その時に構造等が確認された。

螺発は切子形、肉髻珠・白毫には水晶が嵌められ、手は来迎印を結び、足は結跏趺坐する。顔は丸みを有し、伏目細い目に、小さい鼻筋に、軽く結んだ唇は慎ましい様相です。なで肩で薄い衲衣の様式化した表現は、定朝様式を示し、平安後期の作品と考えられる。

2 薬師如來立像

木造 漆箔 影眼  
像高 一六三・〇 cm

古屋薬王院  
千葉県指定有形文化財





修理前の像



背面



右側面

古葉王院木造薬師如来立像の修理  
本像は、昭和二十九年に千葉県の有形文化財に指定され、  
県内でも古相を伝える仏像として、栗山川左岸の河岸段  
丘上にある古葉王院に安置してきた。平成二十一年、  
当ギャラリーで展示公開するに当たって調査したところ、  
痛みが著しく移動 자체が困難であることが分った。本像は  
指定以来、修理することなく、また、本格的な像の調査も  
したことになかったため、制作年代等の謎を秘めていた。  
そこで将来にわたって長く保存するための修理をすべく、  
その費用の補助・助成を各方面に申請したところ、平成二  
十四年度に公益財団法人住友財団、千葉県、横芝光町から  
得られることが出来、修理事業が同年に実施された。  
本像の修理は、主に表面の剥離にかけている漆箔を固定  
し、表面保護のための強化を図ること、欠損している左手  
の新造、像の安定を図るための台座の新造などであった。  
それに伴つて像の調査が行われた。調査の結果、像は一本  
造りであるが、表面に麻布を貼り、その上に木糞漆を塗る  
木芯乾漆造りであることが分かつた。これは手間がかかり、  
平安前期の製法である。胎内は内刳りが施され、隙間があ  
るが、胎内に墨書と経巻があることが分かつた。



胎内納入経巻と鉢



胎内にある経巻



胎内墨書銘の内視鏡写真

胎内墨書は次のとおりである。

大勸進金剛佛子智明

大檀主平常秀平代

大才  
戊寅  
八月八日

承久元年  
慶玄

墨書銘による大檀主平常秀は、千葉常胤の孫で上総權介常秀に当たると考えられ、その生年は墨書年代とも一致する。この上総常秀は龍角寺再建にも関わったとされ、この地域にも影響力を持つていたことが考えられる。

胎内にあつた経巻は、表面がほとんど虫害にあい失われていた。巻いてある紙は硬く、簡単には解けなかつたことから、内容については不明であるが、一部された紙片から経巻と思われる。



3 阿弥陀如来及び両脇侍立像

金銅造

像高 主尊 四六・二 cm

右脇侍 三〇・一 cm  
左脇侍 三〇・五 cm

鎌倉時代

篠本新善光寺

千葉県指定有形文化財

水晶がはめ込まれている。衲衣は両肩から胸前に折り返しを表し、左手は下げる第一・三指を伸ばし他の指を握る刀印を結び、右手は胸の脇で五指を伸ばして立てる施無畏印を結ぶ。台座は蓮実・返花・樞の三重蓮華座で、樞は八角形である。

脇侍は宝冠を被り、右觀音の宝冠正面に阿弥陀像を、左勢至には宝瓶を鋲出していいる。いずれも右手を上にして両手を重ねて



4 阿弥陀如來立像及び兩脇侍立像

銅鑄造 鍍金 彫眼

像高 主尊四八・五cm  
兩脇侍 三〇・五cm

鎌倉時代 十三世紀後半  
小川台隆台寺

千葉県指定有形文化財

善光寺式の阿弥陀三尊像で、主尊の螺髮は施毛型、衲衣は胸前で折り返しを表す。左手は下げて第二・三指を伸ばし他を握った刀印を結び、右手は五指を伸ばして立てる施無畏印を結ぶ。

脇侍は宝冠を被り、右觀音像には宝冠正面に阿弥陀、左勢至には宝瓶を鏄だしている。手は觀音が右手を上に、勢至が左手を上に重ねている。

本主尊は、香取市織幡の薬師如來と同型で鑄造された可能性が考えられて

5 阿弥陀如来及び  
両脇侍立像



木造  
彫眼  
像高  
主尊 九三・三 cm  
右脇侍 五三・五 cm  
左脇侍 五五・五 cm

平安時代後期  
宝米明光院

町指定有形文化財

本像は元々宝米内の阿  
弥陀堂にあつたとされ  
かなり痛みが進んでいた。  
江戸時代にも修復された  
と思われ、その時、脇侍  
に宝冠と天衣が附けられ  
た。主尊の表面には、貼  
付けた麻布が残り、木芯  
乾漆造か。また、主尊の  
白毫には水晶が嵌められ  
ている。



6

阿弥陀如来立像及び

兩脇侍立像

木造 主尊玉眼、彩色

白毫水晶

脇侍影眼

像高 主尊九二・〇 cm

兩脇侍六二・八 cm

江戸時代

傍示戸成就院

主尊の阿弥陀如来は寄木  
造りで、中が中空である。  
脇侍は一木造で、手が別材  
である。主尊の頭は大きめ  
で丸みを帯び、彩色からも  
う少し古いかかもしれない。

7 阿弥陀三尊来迎図

紙本着色

手尊 縦五七・五 cm 横二八・〇 cm

右脇寺 縦五七・七 cm 横二八・〇 cm

左脇侍 縦五七・七 cm 横二八・〇 cm

江戸時代

市野原馬頭観音堂

三幅に分かれて描かれた阿弥陀三尊来迎図で、  
いずれも色彩・筆致は同じで、三幅揃いで描か  
れた図幅である。入っていた箱の裏書には、「京  
土産」と書かれ、京都で購入したものである。

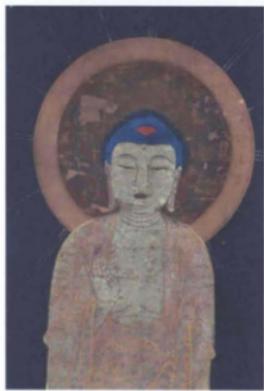
薄い赤色岩彩で三尊と雲台を描いている。  
箱書き 市野原村

天保八酉年十一月吉日

慈恩寺法印覺真

上京土産

これによつて、馬頭観音堂はかつて慈恩寺  
というお寺であつたことが分かる。





8 十一面觀音菩薩立像

木造 玉眼 漆箔 彩色  
像高 一〇四・四cm

江戸時代  
宮内宝持院

本像は、町内仏像では大きいほどで、全体に金箔が残り、状態としてはいいほうであるが、頭上の顔は別材で造りはめているが、四面しか残っていない。体形は少し太めで、衣は立体的に造られ、天衣は別材で付けられている。蓮華座も蓮弁を丁寧に造り、台芯に付けられている。

木造 漆箔 彫眼 肉髻珠

光背から台座下部までの高さ  
三九・八 cm

七八・〇 cm

上原薬師堂

像は右手を欠失している以外は、ほどんど損傷がないよく保存された仏様である。肉髻珠には玉がはめられ、像全体に漆箔を施してあつたと思われるが、今は衲衣のみに残る。光背は飛天光で、台座は蓮華座で、下段の彫刻が細かい。像の面相は少しふくらみのある端正で、全体に丁寧な造りで、手馴れた仏師が作ったものであろう。像本体には修理がないが、光背を修理している。



10 十一面觀音菩薩立像

木造 彩色 漆箔  
像高 四八・五cm

江戸時代

上原持宝院



ほとんど損傷のない仏様で、頭上の十面仏もすべてある。しかし、光背は近代に入つてからの修復の跡があり、釘・銅線による結束、その上から紙を貼つて漆を塗つている。像の面相は端整で、衲衣や天衣など、全体の容像も丁寧な造りで、手馴れた仏師の作であることを想像される。須弥禮と蓮台の工作も細かく、専門の工房で造られたものであろう。



11  
聖観音菩薩立像

木造 漆箔 彫眼

像高 五二・五 cm  
台座からの高さ 六七・八 cm

南北朝時代  
辻觀音院

そんなに古くない時代に修理され、その時に両手は新たに補追されて小さく、また、塗り直されて、今のようになっているが、元々は素地造りの可能性がある。宝冠は後補である。台座は別の物を代用したか。

不動明王立像

木造 彩色 玉眼  
像高 四〇・〇 cm

火炎光背・台座 五九・〇 cm  
江戸時代



辻観音院 像本体は一木造りで、右手に宝剣を持ち、左手は下げて持物は欠損する。火炎光背は、一部が像造時の物であるが、ほとんどは新補されている。台座は赤漆で仕上げられているが、後に群青を塗布している。頭髪の弁髪はなく、新しい様相を示す。



側面

正面



背面

13 昆沙門天立像

木造 彩色 玉眼

像高 四〇・〇 cm

江戸時代  
辻観音院

頭部は嵌め込み式、胴部は寄席木造りで、  
邪鬼座は一本で、台座も一本で周囲の立ち  
上がりを附けている。両手首を欠損し、持  
物は不明である。全体に厚く彩色が施され  
ているが、剥落が著しい。像容がすんぐり  
として、江戸時代の特徴であろうか。  
細かい彩色文様があり、もとの造りはいい。

14

大日如来坐像  
木造 彩色 漆箔  
像高 三七・〇 cm  
江戸時代  
市野原馬頭観音堂  
(現宝米光明院)

飛天光背・蓮台を有する像で、  
頭部・胸・背・手・足の部分を  
合わせた寄木造りである。全体  
は漆箔で仕上げられているが、  
頭髪は群青で彩色されている。  
丁寧な造りであるが、漆箔の剥  
離が甚だしい。



背面

右側面



15

阿弥陀如来坐像

木造

彫眼

彩色

像高

二〇・三cm

台座

光背の高さ四九・三cm

江戸時代

傍示戸成就院

頭

すんぐりした如来像である。

天光

頭は青、衣は弁柄、光背は飛

いる。

天光で、黒地に金彩している。

蓮台

蓮台の台座は、簡略化されて

16

如意輪觀音菩薩坐像  
木造 寄木造 玉眼

白毫水晶 彩色  
像高 二三・七cm

江戸時代  
傍示戸成就院

木造の如意輪觀音は珍しく、  
町内ではこれ以外には確認し  
ていない。しかし、肝心な腕  
をなくし、彩色もだいぶ落ち  
て、頭のかしげ具合となくし  
た立て膝どから、それと分か  
る。蓮台は蓮花弁を付けたも  
のである。





17

## 聖観音菩薩立像

木造 漆箔 彫眼  
像高 六一・〇cm南北朝時代  
市野原馬頭觀音堂

(現宝米光明院)

頭部は別材で、体部は前面と背部が別で、背部は後に新造している。像全体に下地に胡粉を塗り、その上に漆箔をつけて仕上げている。

本像は山武市板附西照寺の十一面観音菩薩立像と像容がよく似ている。



18

阿弥陀如來立像

木造 素地  
像高 四三・三 cm

江戸時代

市野原馬頭觀音堂  
(現宝光明院)

一本造りで像本体から台座まで  
彫り出した像で、素朴であるが、  
軟らかい材であつたためか、虫食  
いが著しい。



19

聖観音菩薩立像  
木造 素地 形眼  
像高 五二・八cm  
江戸時代  
市野原馬頭観音堂  
(現宝米光明院)

本像は一本の木から彫り出した木像で、決して洗練された造りではないが、心のこもった彫りは、円空仏にも通じる。

材質は広葉樹で、虫食いはなく素朴では在るが、しつかりとした仏様である。

菩薩形立像

木造 彩色（弁柄）  
像高 四一・六 cm

江戸時代  
市野原馬頭観音堂

（現宝光明院）

一木造りの像で、手先のみ  
別材で造られていたが、それ  
が失われている。粗いがしつ  
かりした彫りで形相がはつき  
りしている。しかし、像は定  
型的であり、虫食いはないと  
ころから、古くはないと思わ  
れる。





3 1 2  
7 6 5 4 3 2 1

21

七觀音菩薩立像  
木造 彫眼  
像高

江戸時代	台座幅	7	6	5	4	3	2	1
二又長福寺	72	65	54	43	32	21	54	55
	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm
	二二	二三	二六	二三	二七	二五	二一	二〇
	•	•	•	•	•	•	•	○
	八五	五五	〇〇	二〇	一〇	〇〇	一〇	〇〇
	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm

二又長福寺  
七觀音參りがこの地域にあり、石仏では他の地区にあるが、木造での七觀音はこれ以外には知らない。觀音像はいずれも一木造り、素朴な彫りで、素人の作と思われる。台座は後世の作であろう。

二 小さい仏様

22 如来形立像

木造 漆箔

像高 一九・二 cm

鎌倉時代

二又長福寺

小さい仏像であるが、細かい彫り込みは丁寧に仕上げられ、表面の漆箔は残されているところから、平安末から鎌倉時代の作かと思われる。下の菩薩像と一緒に考える必要がある。



23

菩薩形立像

木造 素地

像高 一六・五 cm

江戸時代

二又長福寺

この像も小さく、上と同じ持仏であろうか。上の如来形像とほぼ同じ大きさであるが、こちらは何かに付けられていたと思われ、肩と足間に孔が穿たれている。裾の文様から江戸時代の作と思われる。





如來形立像

一木造り 素地

像高 一六・一 cm

江戸時代

傍示戸成就院

台座と共に一体で彫り上げてある。頭の螺髪はなく、顔は磨り減つて、目鼻が分からなくなっている。全体的に浅い彫りで、素人の作と思われる。



25

如來形立像

木造

彫眼

彩色  
像高 三三・三 cm

江戸時代

宮内宝持院

小さい如來形像であるが、細かい彫刻は丁寧である。しかし、両手は欠損し、表面の彩色は剥落し、下地が見えているのは痛々しい。木芯に下地の胡粉を塗り、赤漆を塗っているが、この胡粉が劣化を早めているようだ。

像は頭が少し前屈みになり、肉髻は高めである所から、古目かもしれない。



26

如来形立像

木造 彫眼  
像高 四一・七  
cm 彩色

江戸時代

二又長福寺  
小さい像であるが、全  
体に丁寧に造られている。  
全体に彩色がどれ、素地  
像のようになつていて  
台座は一木を彫つて  
いる。



27

藏王権現立像

木造 一木造り

像高 三三・五 cm

平安～鎌倉時代か  
篠本三区薬師堂

本像は薬師堂の中に、薬師如来  
と共にあつたが、こちらは一木造  
りで、彫りはしつかりして古相を  
示している。

しかし、顔をはじめ表面のほど  
んどが削れ、その実相は分からな  
くなつてゐる。



28

## 被災仏像（観音像）

木造	右	二七・五
像高	中	四二・五
上原薬師堂	左	三二・〇
		cm cm cm

過去、寺院や堂宇は火災に逢う事が多かつた。今に残されている仏像は、幸いにもそうした災害から免れてきたものである。しかし、この仏像のように、火災に見舞われても、灰の中から拾われ、再び信仰の対象とされてきた仏様も少なくない。



29-1 金剛界曼茶羅  
紙本 着色

縦 八二・〇  
横 六六・五  
江戸時代  
宮内宝持院  
軸装されていたが、掛部  
を欠損している。全体は残  
つていてるが、汚れが著しい。

29  
-2

胎藏界曼荼羅

紙本着色

縦 五八・〇 cm

横 五六・五 cm

江戸時代

宮内宝持院

痛みが著しく、上半分を消失している。中央の大日如来がかろうじて確認でき、その周りの八大如来はかすれている。



五 女性の仏様



30如意輪觀音菩薩図

紙本 着色  
縦 三九・五 cm

横 二三・〇 cm

紙は茶色に変色して  
いるが、絵の線描や色  
彩は鮮明である。



如意輪觀音菩薩像

石造（安山岩）彩色

像高 四六・三cm 台座 一四・五cm

江戸時代（明和六年）

市野原馬頭観音堂

（現宝光明院）

町内には如意輪觀音の石像が多数見られるが、本像のように彩色され、祠に安置されていたのは他には見ない。

本像は彫りが丁寧で、下地に胡粉を塗り、その上から彩色されている。しかし、彩色の上地処理が無く、触ると取れてしまうほど脆弱である。

背面銘文

明和六丑五月

十九夜女人講中

市野原村

背面





33 子安講幡  
 織平織布  
 縦二五九・〇cm  
 横三五・〇cm  
 江戸時代 安政七年  
 辻観音院  
 子安講を開く時、当番の家の前に  
 この幡を掲げた。



32 子安觀音菩薩圖  
 紙本 着色 軸装  
 縦六四・二cm 横二七・〇cm  
 江戸時代  
 辻観音院  
 地区の子安講の時、この子安  
 観音の図幅を当番の家の床の間  
 に掛けた。



34 毘沙門天立像

木造 玉眼 彩色

像高 六〇・〇 cm  
台座からの高さ 九〇・〇 cm

江戸時代  
二又長福寺

太目のがつちりした体躯の像で、  
彩色も鮮やかで、良好な像に見え  
るが、木芯はズブズブに痛んでい  
た。たぶん、一度修復した折に、  
表面に厚く塗物を施したために、  
木芯が呼吸できなくなり、腐敗が  
進行したと思われる。鍬形を付け  
た兜を被り、大きい顔の毘沙門天  
は江戸後期の作か。

妙見菩薩立像

木造 彩色

像高 二三・〇cm

台座 亀頭 三二・三cm

江戸時代

篠本三区弘経寺

妙見菩薩は千葉氏の守護神として信仰され、また、日蓮宗と結びついて、千葉では多くの像が遺こされている。しかし町内では日蓮宗寺院が少なく、妙見菩薩像はこの一尊のみを確認した。

妙見菩薩は北極星を表し、光輪には八星を表す九点が付けられている。台座は波上に靈龜があり、その甲羅の上に童子状の菩薩がのる典型的な妙見菩薩像である。

彩色が鮮明であるが、木芯の傷みは伺え、時間の経過は窺える。

台座裏に「弘化四年大佛師八日市場本町大菱屋繁藏」の墨書きがある。



36 七面大明神立像

木造 彩色  
像高 二三・六 cm

台座からの高さ 三二・四 cm

江戸時代



日蓮宗の総本山久遠寺のある身延山の奥山に七面山がある。その七面山には池があり、竜神が住むと言う。その竜神が天女に化身し、日蓮を守護したことから、七面大明神は日蓮宗の守護神になつたという。別名七面天女とも言う。

本像はもともと篠本三区の山要害台の上に祀られていたと言うが、ある時、本寺に移された。



37  
天神図

紙本 着色

縦七一・七cm 横二八・四cm

江戸時代 市野原馬頭観音堂

この地域でも江戸時代から。  
学問を身に着けたいという願いがあり、天神講が開かれた時、  
掛けられたのがこの天神図である。いわばこの天神図が、  
天神講のあつた証である。  
図は屏風のある台に座り、左を少し前に斜め向う杓を持つ  
天神—菅原道真公を描いている。

「浄土への招待」  
横芝光町の仏像展

刊行 平成二十五年六月二十二日  
編集・発行 横芝光町教育委員会  
印刷 三陽メディア株式会社



宋  
人  
書  
卷  
之  
一  
三  
四